



平成28年9月26日
佛教大学附属幼稚園

「耳は芽」

園長 藤堂俊英

今から27年前になりますが、ある出版社から「何のための知識シリーズ」という企画の第一冊目が出ました。本の名は『耳は何のためにあるか』でした。発売当日、出版社は馴染みの書店に電話をかけ、気になるお客の反応を尋ねたのだそうです。店主は学校帰りの女子高校生たちがその新刊書を見つけ、「おかしな本が出てる！」「耳は何のためにあるかだって！」「聞くためにあるのに決まっているのに」と話している会話を伝えたところ、企画責任者は「しめた、反応があった」と安堵したそうです。その後このシリーズは、目は何のためにあるか、手は何のためにあるか、足は何のためにあるか、口は何のためにあるか、と続きましたが、そのすべてが日本図書館協会選定図書になっています。毎回このシリーズには、医学や文学や哲学など各分野の専門家が、私たちの身体に備わる器官のはたらきを多角的に取り上げる興味深い話が収録されています。

『耳は何のためにあるか』では口承文芸研究家の中村とも子さんが日本に100種近くも残る「聞き耳頭巾」に類する話をとりあげ、私たちの祖先が人のみならず自然から発せられるメッセージにも耳を傾け、お互いのいのちを大切にしてきたことを指摘し、耳鼻咽喉科医の向高洋幸さんは耳に感音聴声機能だけでなく、直立歩行するヒトの上下・左右・前後の運動を安定的に保つための三半規管が隣接していること不思議を取り上げています。

ところで大きな漢語辞典の「耳」のところを引くと、「耳、穀が雨を経て芽を生ず、これを耳という」とあります。「耳」という字には、「穀物が雨にあって芽をだすこと、又はその芽」という意味があるということです。この説明を読んでふと思いつきがありました。それは日本の古典芸能の一つ、能の謡曲『熊野(ゆや)』という作品の中に出る話です。平清盛の三男宗盛は遠江国の熊野(ゆや)という女性を寵愛していました。あるとき熊野は国元から母が病の床についたとの知らせを受け帰郷を申し出るのですが、宗盛は聞き入れず花見の宴に同行させ彼女に舞いを所望します。その時、降り始めた雨を見た熊野は「草木は雨露のめぐみ 養ひ得ては花の父母たり 況や人間に於いてをや」、つまり草木は雨露のめぐみを受けて成長する。だから花にとって雨露は父や母のようなものだ。まして子どもが成長するのに父母のめぐみの潤いは、なくてはならないものだと言語、「いかんせん都の春も惜しけれど 馴れし東の花や散るらん」と、悲母を案ずる歌を詠むのです。「東の花が散ってしまうかもしれない」というところには、母のいのちを思う子の痛切な心の発露があります。それを聞いた宗盛はようやく親を思う子のこころに気づき、熊野に暇をだすのです。

「耳」という字に、これから大きく伸び行く「芽」という意味があるということはとても興味深いことです。芽という伸び行くパワーを、目でもなく口でもなく、私たちヒトが高度に洗練させてきた言葉を受けとめる耳に認めていることは、子どもたちのこころの芽を健やかに育むために、私たちが言葉の環境を第二の母胎のように大切にしなければならないことを示唆しています。耳はなんのためにあるのか、それは聞くためだけでなく、姿勢を正すためにも、こころの芽を育むためにもあるのです。